

# 塩川伸明著作目録

(二〇一二年まで)

## A 著書

### B 共編著

### C 論文ないしそれに準ずるもの

### D 書評

### E 翻訳

### F 事典などの項目

### G インタビューおよび講演（主なものに限る）

### H 小文

### I 対談・座談会など

J (電子版ディスカッション・ペーパー①\*) 研究ノート

K (電子版ディスカッション・ペーパー②\*) 読書ノート

L (電子版ディスカッション・ペーパー③\*) 短評集

\*個人ホームページのURL：<http://www7b.biglobe.ne.jp/~shikawa/>

## A 著書

A・1 『「社会主義国家」と労働者階級』岩波書店、一九八四年

A・2 『スターリン体制下の労働者階級——ソヴェト労働者の構成と状態：一九二九・一九三三年』  
東京大学出版会、一九八五年

A・3 『ソヴェト社会政策史研究——ネツプ・スターリン時代・ペレストロイカ』東京大学出版会、  
一九九一年

A・4 『ペレストロイカの終焉と社会主義の運命』（岩波ブックレット）岩波書店、一九九二年

A・5 『終焉の中のソ連史』（朝日選書）朝日新聞社、一九九三年

A・6 『社会主義とは何だったか』勁草書房、一九九四年

A・7 『ソ連とは何だったか』勁草書房、一九九四年

A・8 『現存した社会主義——リヴァイアサンの素顔』勁草書房、一九九九年

A・9 『《20世紀史》を考える』勁草書房、二〇〇四年

A・10 『民族と言語——多民族国家ソ連の興亡Ⅰ』岩波書店、二〇〇四年

A・11 『国家の構築と解体——多民族国家ソ連の興亡Ⅱ』岩波書店、二〇〇七年

A・12 『ロシアの連邦制と民族問題——多民族国家ソ連の興亡Ⅲ』岩波書店、二〇〇七年

A・13 『民族とネイション——ナショナリズムという難問』（岩波新書）岩波書店、二〇〇八年

A・14 『冷戦終焉20年——何が、どのようにして終わったのか』勁草書房、二〇一〇年

A・15 『民族浄化・人道的介入・新しい冷戦——冷戦後の国際政治』有志舎、二〇一一年

## B 共編著

B・1 石川晃弘・塩川伸明・松里公孝編『スラブの社会』（「講座スラブの世界」第四卷）弘文堂、  
一九九四年

B・2 川端香男里・佐藤経明・中村喜和・和田春樹・塩川伸明・栖原学・沼野充義監修『新版・ロシアを知る事典』平凡社、二〇〇四年

- B・3 塩川伸明・中谷和弘編『国際化と法』（「法の再構築」第二巻）東京大学出版会、二〇〇七年
- B・4 塩川伸明・小松久男・沼野充義・宇山智彦編『ユーラシア世界・1・〈東〉と〈西〉』東京大学出版会、二〇一二年
- B・5 塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界・2・ディアスポラ論』東京大学出版会、二〇一二年
- B・6 塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界・3・記憶とユートピア』東京大学出版会、二〇一二年
- B・7 塩川伸明・小松久男・沼野充義・松井康浩編『ユーラシア世界・4・公共圏と親密圏』東京大学出版会、二〇一二年
- B・8 塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界・5・国家と国際関係』東京大学出版会、二〇一二年

### C 論文ないしそれに準ずるもの

- C・1 「一国社会主義的工業化と対外経済関係」『ロシア史研究』第二二号（一九七三年）
- C・2 「工業化論争」菊地昌典編『ソビエト史研究入門』東京大学出版会、一九七六年
- C・3 「ネップの導入と労働組合」『歴史学研究』第四四三号（一九七七年四月号）〔↓A・3の第一章に収録〕
- C・4 「ネップ初期の労働組合」『ロシア史研究』第二六号（一九七七年）〔↓A・3の第二章に収録〕
- C・5 「スターリンのプロレタリアート独裁論」『思想』一九七七年二月号
- C・6 「ブハーリン理論とネップ期のソ連社会」ステイヴン・コーエン『ブハーリンとポリシェヴィキ革命』未来社、一九七九年
- C・7 「ネップはいつ終わったか」津田塾大学『国際関係学研究』第五号（一九七八年度、一九七九年三月刊）
- C・8 「最近のスターリン体制研究」『歴史学研究』第四六七号（一九七九年四月号）
- C・9 「一九三〇年代ソ連における政策論争に関する一試論」（一）（二）『社会科学研究』第三二巻第一号、二号（一九八〇年）
- C・10 「スターリン体制成立期における労働者統合の問題」（一）（二）『社会科学研究』第三三巻第四号、第六号（一九八一、一九八二年）〔↓改訂版をA・1の第一、四章に収録〕
- C・11 “Labor Turnover in the USSR, 1929-1933,” *Annals of the Institute of Social Science*, No. 23, 1982 〔↓日本語版をA・2の第四章に収録〕
- C・12 「ソヴェト労働者階級の社会的構成およびその変容」『社会科学研究』第三四巻第一号（一九八二年）〔↓改訂版をA・2の第三章に収録〕
- C・13 「出稼ぎ組織化政策とその履行」溪内謙、荒田洋編『ネップからスターリン時代へ』木鐸社、一九八二年 〔↓改訂版をA・2の第二章の一部に収録〕
- C・14 「第一次五カ年計画期ソ連における合理化と労働組織化」『スラヴ研究』第三〇号（一九八二年）〔↓改訂版をA・1の第三章の一部に収録〕
- C・15 “The Collectivization of Agriculture and Otkhodnichestvo in the USSR, 1930,” *Annals of the Institute of Social Science*, No. 24, 1982-83 〔↓日本語版をA・2の第二章の一部に収録〕
- C・16 「ソヴェト社会政策史の一側面」『社会科学研究』第三五巻第五号（一九八四年）〔↓A・3の第六章に収録〕
- C・17 「ソ連における団体協約制度およびその変容」『スラヴ研究』三十一号（一九八四年）〔↓A・3の第六章に収録〕

・3の第五章に収録]

- C - 18 「ドンバス炭鉱の危機と変容」溪内謙編『ソヴェエト政治秩序の形成過程』岩波書店、一九八四年 [↓A・3の第八章に収録]
- C - 19 「ソヴェエト史における党・国家・社会」／「リプライ」溪内謙・荒田洋編『スターリン時代の国家と社会』木鐸社、一九八四年 [↓改訂版をA・5の第I章に収録]
- C - 20 「ロシア・ソ連における社会保険制度の変遷、一九二二―一九三三年」東京大学社会科学研究所編『福祉国家』第二巻、東京大学出版会、一九八五年 [↓A・3の第七章に収録]
- C - 21 “Some Aspects of Japanese Studies on Russian and Soviet History,” *Acta Slavica Iaponica*, Tomus III, Sapporo, 1985.
- C - 22 “A ‘Socialist State’ and the Working Class: Labour Management in the Soviet Factory, 1929-1933,” Paper presented at the Soviet Industrialisation Project Seminar, Centre for Russian and East European Studies, University of Birmingham, May 1986.
- C - 23 「ネップ期の労働者の生活実態」和田春樹編『ロシア史の新しい世界』山川出版社、一九八六年 [↓A・3の第三章に収録]
- C - 24 「スイルツォーフ・ロシナーゼ事件再考」国家学会編『国家学会百年記念・国家と市民』第二巻、有斐閣、一九八七年
- C - 25 「ペレストロイカをどうとらえるか」上・中・下『経済評論』一九八八年五、六、七月号
- C - 26 「ソ連の経済改革と失業問題」『国家学会雑誌』第一〇一卷第七〇八号（一九八八年） [↓A・3の第一〇章に収録]
- C - 27 “‘Политическая ситуация в СССР’ Осень 1930 г.,” (「ソ連の政治情勢、一九三〇年秋」ロシア語) *Acta Slavica Iaponica*, Tomus VII, March 1989
- C - 28 “*Perestroika* and the New Perspective on Soviet History: The case of the history of industrialization and the working class,” in Takayuki Ito (ed.), *Facing Up to the Past: Soviet Historiography under Perestroika*, Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University, 1989.
- C - 29 「一九三〇年代体制とペレストロイカ」『ロシア史研究』第四七号（一九八九年） [↓A・5の第三章に収録]
- C - 30 「現代ソ連の思想状況」『ソ連研究』第九号（一九八九年一〇月）
- C - 31 「ペレストロイカとソ連労働者」上・中・下『経済評論』一九八九年一二月号、一九九〇年一、二月号
- C - 32 “‘Изучение истории СССР в Японии.’ // Вопросы истории (「日本におけるソ連史研究」『歴史の諸問題』, 1990, № 2
- C - 33 「『東』側世界での議会の復権」『ジュリスト』一九九〇年五月一―一五号
- C - 34 「スターリニズムの根源をめぐる最近の論争」『国家学会雑誌』第一〇三巻第七〇八号（一九九〇年） [↓A・5の第IV章に収録]
- C - 35 「現代ソヴェエト政治における民族問題の位置」『ソ連研究』第一一号（一九九〇年）
- C - 36 「『スターリニズムの犠牲』の規模に関する最近の議論」原暉之・藤本和貴編『危機の（社会主義）ソ連』社会評論社、一九九一年 [↓大幅増補版をA・5の第VI章に収録]
- C - 37 「ソ連の民族問題と連邦Ⅱ共和国関係」日本国際問題研究所編『現下ソ連の民族問題Ⅱ』外務省委託研究報告書、一九九一年三月
- C - 38 「ペレストロイカ『後退』の意味するもの」上・下『経済評論』一九九一年七、八月号
- C - 39 「各共和国の動向」木村汎編『エリツイン革命と日本』実業之日本社、一九九一年
- C - 40 “The End of Perestroika?,” *Japan Review of International Affairs*, vol. 5, No. 2 (Fall/Winter 1991).

- C - 41 “Has Perestroika Ended?” in Shugo Minagawa (ed.), *Thorny Path to the Post-Perestroika World: Problems of Institutionalization*, Slavic Research Center, Hokkaido University, 1992.
- C - 42 “The Time of New Smuta: Tendencies Toward Authoritarianism in Successor Countries to the Former USSR,” Paper presented to the First Japan-U.S. Joint Conference on Russia and CIS, May 5-6, 1992, Washington, DC.
- C - 43 「ペレストロイカとその後——『民主化』のパラドクス」和田春樹・小森田秋夫・近藤邦康編『社会主義〉それぞれの苦悩と模索』日本評論社、一九九二年
- C - 44 「社会主義改革論の挫折——経済学者への問いかけ」『社会主義経済学会会報』第三〇号（一九九二年）〔↓A・6の第V章に収録〕
- C - 45 “Russia’s Fourth Smuta: What Was, Is, and Will Be Russia?,” in Osamu Ieda (ed.), *New Order in Post-Communist Eurasia*, Slavic Research Center, Hokkaido University, 1993.
- C - 46 「旧ソ連社会のとらえ方——二層認識から四層認識へ」『ソビエト研究』第九号（白石書店）、一九九三年 〔↓A・7の第I章に収録〕
- C - 47 「ソ連の解体とロシアの危機」近藤邦康、和田春樹編『ペレストロイカと改革・開放——中ソ比較分析』東京大学出版会、一九九三年
- C - 48 「ペレストロイカの終焉とソ連の解体——歴史の必然性再考」『ロシア研究』第一八号（一九九四年）〔↓A・7の第IV章に収録〕
- C - 49 「一九九三年の歴史学界——回顧と展望（ヨーロッパ・現代・東欧）」『史学雑誌』第一〇三編第五号（一九九四年五月）
- C - 50 「旧ソ連における複数政党制の出發」木戸蒨・皆川修吾編『スラブの政治』弘文堂、一九九四年
- C - 51 「旧ソ連の家族と社会」石川晃弘・塩川伸明・松里公孝編『スラブの社会』弘文堂、一九九四年
- C - 52 「伊東孝之氏の書評へのリプライ（回答）」『ロシア史研究』第五六号、一九九五年
- C - 53 「現存した社会主義」の社会科学へ向けて」『比較法学』第五七号（一九九五年）。
- C - 54 “Toward a Historical Analysis of the ‘Socialism That Really Existed,’” in Shugo Minagawa (editor in chief) and Osamu Ieda (editor), *Socio-Economic Dimensions of the Changes in the Slavic-Eurasian World*, Slavic Research Center, Hokkaido University, 1996
- C - 55 「ペレストロイカ・東欧激動・ソ連解体」歴史学研究会編『講座世界史』第一一巻、東京大学出版会、一九九六年
- C - 56 「社会主義と全体主義」再論——『現存した社会主義〉の政治学』へ向けての準備ノート」（討論ペーパー）北海道大学スラブ研究センター重点領域報告輯、No. 14、一九九六年
- C - 57 「政界再編分析の視点」『大統領選挙後のロシア政局の行方』北海道大学スラブ研究センター重点領域報告輯、No. 15、一九九六年
- C - 58 「ロシア・ナショナリズム——その歴史と現在」東京大学シンポジウム〈ロシアはどこへ行く?〉報告ペーパー、一九九六年九月
- C - 59 「第五章 上からの革命」／「第六章 盛期スターリン時代」／「補章 ソ連史におけるジェンダーと家族」田中陽兒・倉持俊一・和田春樹編『世界歴史大系・ロシア史』第三巻、山川出版、一九九七年
- C - 60 「社会主義在世界史中的意義」（「世界史における社会主義」季衛東氏による中国語訳）香港中文大学『二十一世紀』一九九七年一〇月号
- C - 61 「ソ連言語政策史の若干の問題」北海道大学スラブ研究センター重点領域報告輯、No. 42、一九九七年

九九七年

- C・62 「『体制転換の目的』は『西欧化』か?」『スラブ・ユーラシアの変動』(平成九年度重点領域研究公開シンポジウム報告集) 北海道大学スラブ研究センター、一九九八年
- C・63 「体制転換の見取り図」『ロシア・東欧学会年報』第二六号、一九九七年版(一九九八年刊行)
- C・64 「ソ連解体後のロシアとユーラシア空間」『国際問題』一九九八年一月号
- C・65 「ソ連言語政策史再考」『スラヴ研究』第四六号(一九九九年三月) [↓A・10の第二章に収録]
- C・66 「言語と政治——ペレストロイカ期の言語法をめぐって」皆川修吾編『移行期のロシア政治』溪水社、一九九九年 [↓A・10の第三章に収録]
- C・67 「『二〇世紀』と社会主義」『社会科学研究』第五〇巻第五号(一九九九年三月)
- C・68 「帝国の民族政策の基本は同化か?」『ロシア史研究』第六四号(一九九九年四月)
- C・69 「『もう一つの社会』への希求と挫折」『岩波講座・二〇世紀の定義』第二巻(溶けたユートピア)、二〇〇一年
- C・70 「集団的抑圧と個人」江原由美子編『フェミニズムとリベラリズム』勁草書房、二〇〇一年
- C・71 “Комментарии.” // Пространственные факторы в формировании партийных систем. Диалог американистов и постсоветологов. (「コメンタリー」『政党システム形成における空間的要素——アメリカ研究者とポスト・ソヴェト研究者の対話』, Slavic Research Center, Hokkaido University, 2002)
- C・72 「歴史的経験としてのソ連」『比較経済体制研究』第九号(二〇〇二年)
- C・73 「第一章 社会主義体制の変貌・成熟・停滞」/ 「第一章 ペレストロイカの時代」/ 「第二章 ロシア連邦」和田春樹編『ロシア史』山川出版、二〇〇二年
- C・74 「三つの自由主義——市場経済(自由経済)・経済自由主義・政治的リベラリズム」『比較経済体制研究』第一〇号(二〇〇三年)
- C・75 “From Reconstruction to Destruction: Perestroika and the Disintegration of the Soviet Union,” in *Proceedings of the International Conference in Commemoration of the 20<sup>th</sup> Anniversary of ‘Perestroika’, The Korean Association of Slavic Studies, 2005*
- C・76 「研究結果報告書」『東京大学法学部研究・教育年報』第一八号(二〇〇三・二〇〇四)・二〇〇五年
- C・77 「日本におけるロシア史研究の五〇年」『ロシア史研究』第七九号(二〇〇六年)
- C・78 「国家の統合・分裂とシティズンシップ——ソ連解体前後の国籍法論争を中心に」塩川伸明・中谷和弘編『国際化と法』(「法の再構築」第二巻) 東京大学出版会、二〇〇七年
- C・79 「中谷和弘と共同執筆」『序』塩川伸明・中谷和弘編『国際化と法』(「法の再構築」第二巻) 東京大学出版会、二〇〇七年
- C・80 「ソ連解体の最終局面——ゴルバチョフ・フォンド・アルヒーフの資料から」『国家学会雑誌』第二二〇巻第七八号(二〇〇七年)
- C・81 「ロシア革命九〇年を考える」『ユーラシア研究』第三七号(二〇〇七年)
- C・82 「ソ連史研究の方法と視角について——高田和夫の批評に答える」『歴史学研究』第八四七号(二〇〇八年一月)
- C・83 「旧ソ連地域の民族問題」『ユーラシア研究』第四〇号(二〇〇九年五月)
- C・84 「藤田『社会主義史』論との対話——藤田勇『自由・民主主義と社会主義1917-1991』を読む」『社会体制と法』第一〇号(二〇〇九年六月)
- C・85 「現代史における時間感覚——事件・歴史家・読者の間の対話における距離感」『アリーナ』

- (中部大学編集、風媒社発行)、第一〇号、二〇一〇年
- C・86 「《成熟Ⅱ停滞》期のソ連社会——政治人類学的考察の試み」『スラヴ文化研究』(東京外国語大学)第九号(二〇一〇年度、刊行は二〇一一年三月)
- C・87 「解説」(テリー・マーチン『アフアーマティヴ・アクションの帝国——ソ連の民族とナショナリズム、1923-1939年』明石書店、二〇一一年)
- C・88 「スターリニズム・全体主義論・比較史——バベロフスキ氏の報告原稿に寄せて」『現代史研究』第五七号(二〇一一年)
- C・89 「ソ連はどうして解体/崩壊したか」村岡到編『歴史の教訓と社会主義』ロゴス、二〇一二年
- C・90 「小松久男・沼野充義と共同執筆」『序——越境と変容の場としてのユーラシア世界』塩川伸明・小松久男・沼野充義・宇山智彦編『ユーラシア世界・1・〈東〉と〈西〉』東京大学出版会、二〇一二年
- C・91 「総論 国家と国際関係」塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界・5・国家と国際関係』東京大学出版会、二〇一二年
- C・92 「ソ連邦の解体過程とその後——連邦内擬似国際関係から新しい国際関係へ」塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界・5・国家と国際関係』東京大学出版会、二〇一二年

## D 書評

- D・1 Sheila Fitzpatrick (ed.), *Cultural Revolution in Russia, 1928-1931*, 『国家学会雑誌』第九二巻第五〇六号(一九七九年六月) [↓A・5の補論D1に収録]
- D・2 辻義昌『ロシア革命と労使関係の展開』『日本労働協会雑誌』第二七八号(一九八二年五月号)
- D・3 下斗米伸夫『ソビエト政治と労働組合』『経済学論集』第四九巻第一号(一九八三年)
- D・4 同上書『ロシア史研究』第三七号(一九八三年)
- D・5 A・ノーフ『スターリンからブレジネフまで』『週刊ポスト』一九八三年九月二日号
- D・6 Arcadius Kahan and Blair Ruble (eds.), *Industrial Labour in the USSR*. Leonard Schapiro and Joseph Godson (eds.), *The Soviet Worker: Illusions and Realities*; Blair Ruble, *Soviet Trade Unions: Their Development in the 1970s*. 『国家学会雑誌』第九六巻第九一〇号(一九八三年一〇月)
- D・7 R・ヒル『ソ連の政治改革』『エコノミスト』一九八四年四月一七日号
- D・8 藤田勇編『社会主義と自由権』『東京大学新聞』一九八四年九月二五日号
- D・9 山内昌之『スルタンガリエフの夢』『朝日ジャーナル』一九八七年二月一三日号
- D・10 Sheila Fitzpatrick, *New Perspectives on Stalinism*, 『ロシア史研究』第四五号(一九八七年九月) [↓A・5の補論D2に収録]
- D・11 Robert Conquest, *Inside Stalin's Secret Police*; J. Arch Getty, *Origins of the Great Purges*, 『国家学会雑誌』第一〇〇巻第一一〇二号(一九八七年一月) [↓A・5の補論Eに収録]
- D・12 溪内謙『スターリン政治体制の成立』『国家学会雑誌』第一〇二巻第三〇四号(一九八九年三月) [↓A・5の第V章に収録]
- D・13 大津定美『現代ソ連の労働市場』一橋大学経済研究所編『経済研究』第四一巻第一号(一九九〇年一月)
- D・14 R・デイヴィス『ペレストロイカと歴史像の転換』『朝日ジャーナル』一九九〇年八月三日号
- D・15 長谷川毅『ロシア革命下ペトログラードの市民生活』『ロシア史研究』第四九号(一九九〇年) [↓A・5の補論D2に収録]
- D・16 アレクサンドル・ツイプロ『コミュニズムとの訣別』『エコノミスト』一九九四年八月二日号

- D・17 原暉之『インディギルカ号の悲劇』*Russian Review*, vol. 54, No. 3 (July 1995)
- D・18 石井規衛『文明としてのソ連』『史学雑誌』第一〇五編第三号(一九九六年三月)
- D・19 M・ゴルバチョフ『ゴルバチョフ回想録』『へるめす』一九九六年九月号
- D・20 大野健一『市場移行戦略』『へるめす』一九九七年三月号
- D・21 M. Malia, *The Soviet Tragedy*; M・メイリヤ『ソヴィエトの悲劇』『国家学会雑誌』第一一〇巻第一一〇二号(一九九七年二月)
- D・22 富田武『スターリニズムの統治構造』『スラヴ研究』第四五号(一九九八年三月)
- D・23 永田えり子『道徳派フェミニスト宣言』『三田社会学』第三号(一九九八年)
- D・24 Terry Martin, *The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939*, 『ロシア史研究』第七二号(二〇〇三年五月)
- D・25 亀山郁夫『大審問官スターリン』(共同通信より配信、『秋田さきがけ』二〇〇六年三月一日、『神戸新聞』二〇〇六年三月二六日、『信濃毎日新聞』二〇〇六年三月二六日等に掲載)
- D・26 同上書、日本ロシア文学会『ロシア語ロシア文学研究』第三九号(二〇〇七年)
- D・27 アーチャー・ブラウン『ゴルバチョフ・ファクター』日本国際問題研究所『国際問題』二〇〇八年九月号
- D・28 北海道大学スラブ研究センター監修『講座スラブ・ユーラシア学』(全三巻)『ロシア史研究』第八三号(二〇〇八年)
- D・29 鶴見太郎『ロシア・シオニズムの想像力』『思想』二〇一二年五月号
- D・30 砂野幸稔編『多言語主義再考——多言語状況の比較研究』『ことばと社会』第一四号(二〇一二年)
- D・31 アーチャー・ブラウン『共産主義の興亡』『日本経済新聞』二〇一二年一〇月二九日

## E 翻訳

- E・1 E・H・カー『ロシア革命——レーニンからスターリンへ、一九一七・一九二九年』岩波現代選書、一九七九年(改訳版、岩波現代文庫、二〇〇〇年)
- E・2 S・F・コーエン『ブーリンとボリシェヴィキ革命』未来社、一九七九年
- E・3 M・シートン・ワトソン『文学作品にみるソヴェト人の息吹』(共訳)、朝日新聞社、一九八八年
- E・4 T・ザスラーフスカヤ『ペレストロイカの社会的管理の戦略』アフナーシエフ編『ペレストロイカ の 思想』群像社、一九八九年

## F 事典などの項目

- F・1 「戦時共産主義」「ネップ」「五カ年計画」など『世界大百科事典』平凡社、一九八一・八三年
- F・2 「工業化論争」など『日本大百科全書』小学館、一九八四・九四年
- F・3 「ソ連の政治」という大項目中の「革命後の歴史」「政治制度」「ソ連共産党」など『政治学事典』大学教育社、一九九一年
- F・4 「官僚制」「行政区分」「労働組合」など(川端香男里・佐藤経明・中村喜和・和田春樹監修)『ロシア・ソ連を知る事典』平凡社、一九八九年
- F・5 「レーニン」「スターリン」「ゴルバチョフ』『世界史写真集』第V期、山川出版、一九九一年
- F・6 「概観——ロシア政治への視点」ユーラシア研究所編『情報総覧 現代のロシア』大空社、一九九八年

- F・7 「『史的唯物論』」「ソヴェト」「ブハーリン」「ペレストロイカ」『哲学・思想事典』岩波書店、一九九八年
- F・8 「ロシア連邦」「五カ年計画」『CD・ROM版世界大百科事典』日立デジタル平凡社、一九九八年（「ロシア連邦」についての一部改訂版、『平凡社百科年鑑』二〇〇〇年）
- F・9 「CIS」「ソ連」「ソ連共産党」「ペレストロイカ」「ロシア連邦」その他『世界民族問題事典』平凡社、一九九五年、新訂増補版、二〇〇二年
- F・10 「言語政策」「在外ロシア人」「ソヴェト」「ソ連」「ペレストロイカ」「民族問題」「ロシア連邦」など（川端香男里・佐藤経明・中村喜和・和田春樹・塩川伸明・栖原学・沼野充義監修）『新版・ロシアを知る事典』平凡社、二〇〇四年
- F・11 「社会主義国家」「スターリン」『歴史学事典』第一二巻（王と国家）、弘文堂、二〇〇五年
- F・12 「エリツイン」「ゴルバチョフ」「ソ連共産党」「ソ連行政区分」「ソ連邦・ロシア」「ペレストロイカ」『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、二〇〇五年
- F・13 「トロツキー」「ブハーリン」『国際政治事典』弘文堂、二〇〇五年
- F・14 「民族問題」「カー」「ブハーリン」『現代社会学事典』弘文堂、二〇一二年
- F・15 「社会主義、共産主義」「粛清」『ジェノサイド事典（用語篇）』勉誠出版、未刊
- G インタビューおよび講演**（主なものに限る）
- G・1 「フランス革命からソ連消滅までの二〇〇年」『毎日ムック・シリーズ・20世紀の記憶、新たな戦争、民族浄化・宗教・電網、1990-1999』毎日新聞社、二〇〇一年
- G・2 「旧ソ連地域の民族問題 その文脈と視点——コーカサスに力点をおきながら」（日本記者クラブにおける講演、二〇〇九年四月三日）
- G・3 「ペレストロイカ・冷戦終焉・ソ連解体——20年後の地点からのパースペクティヴ」『比較地域大國論集』第三号（唐亮編）『ユーラシア地域大國の政治比較——共同作業の課題と分析の方法』北海道大学スラブ研究センター、二〇一〇年（）

## H 小文

- H・1 「今日におけるスターリニズム研究の意味」上・下『UP』東京大学出版会、第一五七、一五八号（一九八五年一、二月）（↓A・7の第II章に収録）
- H・2 「アメリカ便り」(1)・(4)『窓』ナウカ書店、第五四・五七号（一九八五・八六年）
- H・3 「ゴルバチョフ改革の行方」『北海道新聞』一九八七年四月七日号
- H・4 「訳者あとがき」M・シートン・ワトソン『文学作品にみるソヴェト人の息吹』朝日新聞社、一九八八年
- H・5 「私の見たペレストロイカ」『東京大学新聞』一九八八年二月二〇日号
- H・6 「突進する『ゴルバチョフ』を阻む壁——89年ソ連情勢を読む」『朝日ジャーナル』一九八九年一月六日号
- H・7 「ペレストロイカとブハーリン」上・下『未来』一九八九年二月号、三月号（↓A・5の補論Bに収録）
- H・8 「編集後記」ソビエト史研究会編『ソ連農業の歴史と現在』木鐸社、一九八九年
- H・9 「スターリン」『歴史読本ワールド』第一七号（一九八九年九月）（↓A・5の補論Aに収録）
- H・10 「ソ連の新しい政治機構について」東京書籍『高校通信（現代社会、倫理、政治・経済）』第二八七号（一九八九年九月）



- H・11 「ペレストロイカと女性」『ソビエト研究所ビュレティン』第四号（一九八九年八月）
- H・12 「社会主義の行方」『東京大学新聞』一九八九年一月二八日号
- H・13 「現代ソ連の家族」『月刊社会教育』一九九〇年三月号
- H・14 「長期的、短期的意義の区別を——基本大綱案を読んで」『毎日新聞』一九九〇年三月一日号
- H・15 「改革続くソ連の政治制度」東京書籍『高校通信（現代社会、倫理、政治・経済）』第二九五号（一九九〇年六月）
- H・16 「ソ連の大統領制」『ジュリスト』一九九〇年六月一五日号
- H・17 「エリツイン脱党の衝撃——土壇場で踏ん張る保守派の粘り腰」『朝日ジャーナル』一九九〇年七月二七日号
- H・18 「ペレストロイカと社会政策——経済改革と社会政策の矛盾」『国際情報資料』（国際親善交流センター）第九号、一九九〇年一二月
- H・19 「新しい世界像を求めて——ソ連改革の行方」『読売新聞』一九九一年四月一日号夕刊
- H・20 「混迷深めるソ連の政治」『高校通信（現代社会、倫理、政治・経済）』第三〇三号（一九九一年四月）
- H・21 「ソ連、国内協調体制を模索」『日本経済新聞』一九九一年六月二五日号
- H・22 「もう止められぬ党崩壊」『アエラ』一九九一年九月三日号
- H・23 「遠心力強まり、対立深まる」『アエラ』一九九一年九月一〇日号
- H・24 「クーデター・経営者団体・労働組合」『UP』一九九一年一〇月号
- H・25 「奇妙なクーデター」から『ロシア最後の革命』へ『世界』一九九一年一一月号
- H・26 「新しい世界像を求めて——旧ソ連に“権威主義の誘惑”」『読売新聞』一九九二年一月二一日号
- H・27 「ソ連ジェンダー学センターのこと」『UP』一九九二年二月号
- H・28 「アンケート回答」東大教師が新人生にすすめる本『UP』一九九二年四月号
- H・29 「ソ連の解体と今後の課題」『高校通信（現代社会、倫理、政治・経済）』第三一三号（一九九二年四月）
- H・30 「旧ソ連における『権威主義論』の再浮上」『旧ソ連邦の模索する政治システムの諸問題』（スラブ研究センター研究報告シリーズNo.38）、北海道大学スラブ研究センター、一九九二年
- H・31 「アンケート回答」ソ連解体とロシア史研究『ロシア史研究』第五一号（一九九二年）
- H・32 「ロシアの武力衝突」共同通信社より配信、『高知新聞』一九九三年一〇月八日号、『信濃毎日新聞』一九九三年一〇月九日号などに掲載
- H・33 「『ロシア新聞』と『独立新聞』」東京大学社会情報研究所『情報メディア研究資料センターニュース』第四号（一九九三年一二月）
- H・34 「スターリンのテロルの犠牲者数について」『社会主義法のうごき』第六八号（一九九四年一月）
- H・35 「『現存した社会主義』文化として理解も必要」『朝日新聞』一九九五年三月一五日夕刊
- H・36 「『停滞の時代』と偏見」群像社『群』第七号（一九九五年一〇月）
- H・37 「文化としての『現存した社会主義』（講演要旨）」東京女子大学『史論』第四九集（一九九六年）
- H・38 「タジキスタン内戦とロシア軍——『精神の声』の背景」（映画『精神の声』プログラム）、パンドラ社、一九九六年
- H・39 「ロシア人にとっての中央アジア——『精神の声』に寄せて」『ユリイカ』臨時増刊（総特集

ソクローフ) 一九九六年八月

H・40 「菊地昌典先生を偲んで——《歴史の主体でもあった歴史家の時代》の終わり」『敬愛大学国際研究』第二号(一九九八年一月)

H・41 「二つのゴルバチョフ論」上・下『UP』一九九九年一、二月号

H・42 「プーチン氏当選、わたしはこう見る」『北海道新聞』二〇〇〇年三月二八日

H・43 「ロシア権力の行方」『読売新聞』上・下、夕刊、二〇〇〇年四月三日、四日

H・44 「大会印象記」『ロシア史研究会ニューズレター』第四一号(二〇〇一年二月)

H・45 「地域よもやま話——ヘユーラシア」『地域研究?』『日本比較政治学会ニューズレター』第一二号(二〇〇四年)

H・46 「栖原学、沼野充義と共同執筆」「はじめに」『新版・ロシアを知る事典』平凡社、二〇〇四年

H・47 「冷戦・ソ連・社会主義」『週刊朝日百科・日本の歴史』第一一五号(二〇〇四年八月二二日)

H・48 「溪内謙先生を悼む」『ロシア史研究』第七五号(二〇〇四年一月)

H・49 「日露戦争から一〇〇年」『東京大学新聞』二〇〇五年一月二九日

H・50 「新委員長挨拶」『ロシア史研ニューズレター』第六一号(二〇〇六年一月)

H・51 「(淡青評論)『勝ち組』『負け組』」『東京大学内広報』一三三四号(二〇〇六年四月二二日)

H・52 「日南田静真先生のこと」『想い出の記——教育者、研究者、そして人間としての日南田静真』(非売品)、二〇〇七年

H・53 「時代の磁場」亀山哲郎写真集『北極圏のアウシュヴィッツ——知られざる世界文化遺産』ブツキング、二〇〇七年

H・54 「思い出すことつれづれ」『保田孝一先生追悼文集』保田孝一先生を偲ぶ会(非売品)、二〇〇七年

H・55 「青春の一冊——『共同研究 転向』思想の科学研究会編」『東京大学新聞』二〇〇八年五月六日号

H・56 無題(西川正雄先生お別れ会における発言)『記録・西川正雄先生お別れ会』同会世話人監修・製作(非売品)、二〇〇八年

H・57 「私のすすめる岩波新書」『図書』二〇〇八年臨時増刊号

H・58 「イグナティエフと『より小さな悪』——M・イグナティエフ著『許される悪はあるのか?』をめぐって」『風のたより』(風行社)第四六号(二〇一二年)

H・59 「ロシアは西か、東か——問い自体を問い直す」『UP』二〇一二年六月号

## I 対談・座談会など

I・1 佐藤経明・塩川伸明・山内昌之「『新生ソ連』カギ握る民族問題」『読売新聞』一九九〇年三月一六日

I・2 佐藤経明・塩川伸明「ソ連政治経済の現状と展望」『月刊社会党』一九九一年六月号

I・3 山内昌之・塩川伸明・谷畑良三「ソ連邦消滅識者座談会——カギ握るイスラム圏」『毎日新聞』一九九一年二月一〇日

I・4 「シンポジウム・ソ連とロシアへの経済協力システムをどう考えるか」(尾上久雄・新田俊三・佐藤経明・塩川伸明・吉田進・大島梓・杉森康二・稲葉修三)『自由』一九九二年一月号

I・5 塩川伸明・加々美光行・緒方康「中国とロシア——その党史と政治改革の構図」『中国21』第一四号(二〇〇二年一〇月)

I・6 塩川伸明・小松久男・沼野充義「ユーラシア世界」『UP』二〇一二年一〇月号

## J (電子版ディスカッション・ペーパー①) 研究ノート

- J・1 「論文の書き方」(一九九五年)
- J・2 「『分かりやすい文章』ということ」(一九九六年)
- J・3 「教養の解体の後に」(二〇〇一年)
- J・4 「『現存した社会主義——リヴァイアサンの素顔』への様々な論評に接して」(二〇〇一年)
- J・5 「ソ連史(現存した社会主義の歴史)の観点から」(日本政治学会大会二〇〇二年度大会共通論題「20世紀は政治学をどう変えたか」報告(二〇〇二年))
- J・6 「様々なマルクス主義思想の系譜——見取り図形成のための初歩的試み」(二〇〇三年)
- J・7 「『民族浄化』という言葉について」(二〇〇四年) 「↓改訂版をA・15の第一章に収録」
- J・8 「コソヴォ問題と『人道的介入(干渉)』論——日本における国際政治・国際法研究者の言説をめぐって」(二〇〇四・〇五年) 「↓改訂版をA・15の第二章に収録」
- J・9 「最近のウクライナの政治情勢について(覚書)」(二〇〇四・〇五年) 「↓全面的に改稿した事実上の新稿をA・15の第五章に収録」
- J・10 「ある多言語国家の経験——ソ連邦の形成・変容・解体(多言語社会研究会二〇〇六年度大会における講演)」(二〇〇六年)
- J・11 「スターリン批判と日本——予備的覚書」(二〇〇七年)
- J・12 「二〇〇七年一二月ロシア下院選挙をめぐって——直後の時点での試論」(二〇〇七年)
- J・13 「最近のロシア・グルジア・南オセチア衝突をめぐって」(二〇〇八年) 「↓全面的に改稿した事実上の新稿をA・15の第六章に収録」
- J・14 「アーカイヴ(アーカイブ)という言葉について」(二〇〇九年)
- J・15 「『民族とネイション——ナショナルリズムという難問』への反響と応答」(二〇〇九年)
- J・16 「ペレストロイカから現代ロシアまで」(二〇一二年)
- J・17 「池田嘉郎氏の『冷戦終焉20年』評に対する第一次的応答」(二〇一二年)「これはホームページ上にはアップロードせず、ソビエト史研究会のメーリングリストで回覧した」

## K (電子版ディスカッション・ペーパー②) 読書ノート

- K・1 ユン・チアン『ワイルド・スワン』(一九九五・九六年)
- K・2 クーン『科学革命の構造』(一九九四・九六年)
- K・3 和田春樹『ペレストロイカ——成果と危機』／『歴史としての社会主義』(一九九五・九六年)
- K・4 クンデラ『存在の耐えられない軽さ』(一九九五・九六年)
- K・5 石田雄『社会科学再考』(一九九五・九六年)
- K・6 佐伯胖『コンピュータと教育』(一九九六年)
- K・7 サイード『オリエンタリズム』(一九九六年)
- K・8 矢澤修次郎『アメリカ知識人の思想』(一九九六年)
- K・9 みずが編集部編『丸山眞男の世界』(一九九六・九七年)
- K・10 ベネディクト『菊と刀』(一九九七年)
- K・11 ミフニク『民主主義の天使』(一九九七年)
- K・12 瀬地山角『東アジアの家父長制』(一九九七年)
- K・13 ポパー『歴史主義の貧困』(一九九七年)

- K・14 袴田茂樹『文化のリアリテイ』（一九九八年）
- K・15 井上達夫『他者への自由』（一九九八年）
- K・16 クチンスキー『クチンスキー回想録、1945-1989』正統派の異端者』（二〇〇〇年）
- K・17 加藤典洋『敗戦後論』（二〇〇〇年）〔↓A・9の付録1に収録〕
- K・18 カー『歴史とは何か』（二〇〇〇年）〔↓全面的に改訂した事実上の新稿をA・9の第11・12章に収録〕
- K・19 金森修『サイエンス・ウォーズ』（二〇〇一年）
- K・20 立岩真也『私的所有論』（二〇〇一年）
- K・21 藤原帰一『戦争を記憶する』（二〇〇一年）〔↓A・9の付録2に収録〕
- K・22 サーヘニー『ロシアのオリエンタリズム』（二〇〇一年）
- K・23 数土直紀『理解できない他者と理解されない自己』（二〇〇一年）
- K・24 杉島敬志編『人類学的実践の再構築』（二〇〇二年）
- K・25 桑原草子『シクタージの犯罪』（二〇〇三年）
- K・26 イグナティエフ『ヴァーチャル・ウォー』（二〇〇三年）〔↓改訂版をA・15の第三章前半部に収録〕
- K・27 Will Kymlicka and Magda Opalski (eds.), *Can Liberal Pluralism Be Exported? Western Political Theory and Ethnic Relations in Eastern Europe.* (二〇〇三年)
- K・28 ソーカル、ブリクモン『知の欺瞞』（二〇〇三年）
- K・29 イグナティエフ『軽い帝国』（二〇〇四年）〔↓改訂版をA・15の第三章後半部に収録〕
- K・30 番外 ド・マン論争とソーカル論争（二〇〇四年）
- K・31 小英二『〈民主〉と〈愛国〉』（二〇〇五年）
- K・32 武田泰淳『政治家の文章』／和田春樹『テロルと改革』（二〇〇五年）
- K・33 川本隆史編『ケアの社会倫理学』（二〇〇六年）
- K・34 ギリガン『もうひとつの声』（二〇〇六年）
- K・35 岩崎稔・上野千鶴子・成田龍一編『戦後思想の名著50』（二〇〇六年）
- K・36 ロールズ『万民の法』（二〇〇六・〇七年）〔↓改訂版をA・15の第七章に収録〕
- K・37 市野川容孝『社会』（二〇〇七年）
- K・38 大嶽秀夫『新左翼の遺産』（二〇〇七年）
- K・39 大澤真幸『ナシヨナリズムの由来』（二〇〇七年）
- K・40 三谷博『明治維新を考える』（二〇〇八年）
- K・41 ハスラム『誠実という悪徳——E・H・カー1892-1982』（二〇〇八年）〔↓改訂版をA・15の第九章に収録〕
- K・42 アーレント『イエルサレムのアイヒマン』（二〇〇九年）〔↓改訂版をA・15の第八章に収録〕
- K・43 小英二『1968』（二〇一〇年）
- K・44 古田元夫『ドイモイの誕生』（二〇一〇年）
- K・45 柄谷行人『トランスクリティーク』／『世界共和国へ』／『世界史の構造』（二〇一二年）
- L** (電子版ディスカッション・ペーパー③) 短評集
- L・1 モンテフィオリ『スターリン——赤い皇帝と廷臣たち』（二〇一〇年）
- L・2 レムニック『レーニンの墓——ソ連帝国最後の日々』（二〇一一年）
- L・3 マイヤー『1989 世界を変えた年』（二〇一一年）

- L・4 米田綱路『モスクワの孤独——「雪どけ」からプーチン時代のインテリゲンツィア』(二〇一一年)
- L・5 竹内修司『1989年』／薬師院仁志『社会主義の誤解を解く』(二〇一一年)
- L・6 トラヴェルソ『全体主義』(二〇一一年)
- L・7 ファイジズ『囁きと密告——スターリン時代の家族の歴史』(二〇一一年)
- L・8 王前『中国が読んだ現代思想——サルトルからデリダ、シュミット、ロールズまで』(二〇一一年)
- L・9 デミック『密閉国家に生きる——私たちが愛して憎んだ北朝鮮』(二〇一一年)